

現代建築
水滸伝

建築少年 たちの夢

布野修司

安藤忠雄

藤森照信

伊東豊雄

山本理顕

石山修武

渡辺豊和

象設計集団

原広司

磯崎新

一九六〇年代末から七〇年代にかけて、
全共闘運動が燃えさかる中に、
建築少年たちの「梁山泊」が日本各地にいくつもできた。
そうした「梁山泊」の中から
世界に名を轟かせる建築家が育っていった。
本書は、そうした建築家たちと「梁山泊」で出会い、
その活動を見続けてきた著者による、
いわば「現代建築水滸伝」である。

序章	近代建築批判の行方	メタボリズム以後	6
第一章	永遠の建築少年	安藤忠雄	17
第二章	建築の始原へ	藤森照信	53
第三章	かたちの永久革命	伊東豊雄	89
第四章	家族と地域のかたち	山本理顕	125
第五章	セルフビルドの世界	石山修武	163
第六章	建築の遺伝子	渡辺豊和	201
第七章	地球に根ざして	象設計集団	237
第八章	集落から宇宙へ	原広司	269
第九章	「世界建築」の羅針盤	磯崎新	303
終章	建築の根源	建築少年たちへ	347
あとがき			359
人名・グループ名索引			367

住吉の長屋

一〇軒足らずの住宅の設計を忙しくこなしながら、並行して、「住吉の長屋（東邸）」が設計された（一九七六年）。そして、この「住吉の長屋」は一九七九年の日本建築学会賞を受賞する。宮脇檀の「松川ボックス」、谷口吉生＋高宮眞介の「資生堂アートハウス」との同時受賞であった。

安藤の日本建築学会賞受賞は、象設計集団＋アトリエ・モビル（名護市庁舎）一九八一年、毛綱毅曠（釧路市立博物館・釧路市湿原展望資料館）一九八四年、長谷川逸子（眉山ホール）一九八五年）に先立つ。原広司（田崎美術館）一九八六年、さらに渡辺豊和（龍神村民体育館）一九八七年）より早い。翌年、林雅子が「二連の住宅」で受賞しているのに比べると、たった二戸の住宅での受賞は異例の評価といっている。

作品賞は、前年度「該当作品なし」である。一九七九年度も、「該当作品なし」となりそうであった。総評は、「作品賞の空白が続くことによる今後への影響が憂慮された結果、審査の方針を、作品そのものより、作品を生み出した設計者の精神、考え方の可能性、制作態度をより重視する方向に変えることによって、該当作品を得ることとしたのである」（『建築雑誌』一九八〇年八月号）という。両年度の審査委員長は大江宏である。当時、彰国社で刊行が企画されていた新建築学大系第一巻『建築概論』の編集コア・スタッフとして僕は大江先生と頻繁に会う機会があった。当時住んでいた下馬のアパートがたまたま先生のお宅に近かったこともあって深夜にタクシーで送って頂くことも度々であった。直接話されることはなかったが、「総合得点の高い」有力候補の「制作態度」は認められない、という雰囲気であった。退けられたのは「ひろしま美術館」の作者である。

安藤忠雄はだからラッキーであったといっている。この受賞が安藤の建築家としての出発点になる大きな



安藤忠雄建築研究所「住吉の長屋」1976年

建物を上から見ると、インベーダーゲームのキャラクターのようで、異世界から舞い降りたかのようだ。建築の訓練は受けたといえ、藤森の本領は建築史であって、建築のプロから見れば素人である。この建築はおよそ洗練とか、熟練とかからは遠い。下手くそといってもいい。しかし、出来上がった空間には建築の原点に関わる迫力がある。素朴に建てよ、誰でも建築家であり得るのだ、そんな藤森の声が聞こえるような気がしてくる^{*12}。

右に書いたように、一カ所、食堂は「すごい」と思った。まるで「林」のように柱が「自在」に立っているのである。しかし、構造はどうなってるんだろう、という「疑い」も瞬時に持った。プランニングは一々気になった。バットレスが飛び出して、ただの光庭と化した空間には心底首を傾げた。構造分野を代表する委員であった渡辺邦夫さんが、これは二〇年たったら「プランプランになる」といったのが、ずしりと僕の評価に効いた。

賞というものにはポリティカルなバランスというものがある。熊本アートのプロジェクトの一環であることを最大限考慮して一票を投じた。当然、協働設計者（藤森照信＋入江雅昭＋柴田真秀＋西山英夫共同体）の役割を大きく評価してのことである。しかし、受賞者は藤森ひとりということになった。経緯は省くが、不満であった。次のように総評を書いた。

「最終判断には委員会全体のある種のバランス感覚が働いていると思う。そういう意味では妥当な選考であった。

ただ個人的評価は異なる。第一次選考で残った八作品の中で最後まで押したのは團紀彦の『上林暁文学記念館』、横内敏人の『三方町縄文博物館』、松永安光の『中島ガーデン』の三作品である。前二作品は第一次



次頁：

藤森照信＋入江雅昭＋柴田真秀＋西山英夫「熊本県立農業大学校学生寮」2000年

その命名に時代の雰囲気と伊東の意気込みが表されている。そして、『都市住宅』誌上でのデビュー作「アルミの家」（一九七一年）は鮮烈であった―繰り返し書くけど、僕らの学生時代の『都市住宅』は実に刺激的だった―。しかし、「千ヶ滝の山荘」（一九七四年）を経て次の飛躍のステップとなる「中野本町の家」（一九七六年）まで、クロニクルには空白がある。

独立して事務所設立まで、伊東豊雄は、東京大学吉武研究室の研究生となっていた。けれども、当時の東大建築学科は「設計」どころか「研究」すらできなかった。その年の一月、「安田講堂」が「落城」し、「東大闘争」は終息に向かいだすことになるが、誰も予測できない混乱が続いていたのである。当時、吉武研究室では、「設計」「研究」の根底が問われており、研究室をべー

スに行ってきた設計活動そのものが批判（産学協同批判）に晒される状況にあった。この点、産学連携をうたう昨今の大学をめぐる状況には隔世の感がある。僕は、一九七一年に卒論生として吉武研究室に配属されたからすれ違いであるが、伊東豊雄の後輩になる。最初に会って吉武研究室に在籍した当時のことを聞かされたが、実は、石井和紘の「直島小学校」（一九七〇年）を手伝ったのだという。「直島小学校」の設計を頼まれていた吉武先生は、担当者の造反に困り果てるが、やむなく、設計作業を若い石井和紘、難波和彦に委ねることになる。ちょうど研究生として戻ってきた伊東豊雄に「面倒を見てやってくれ」ということになったというのである。

そして、オイルショック（一九七三年）が来る。日本列島がパニックとなった。イラン革命（一九七八〜七九年）で第二次オイルショックに見舞われ、一九七〇年代は若い建築家にとってバブル世代には想像できないほど厳しい時代であった。

伊東は独立以降、実現する作品はほとんどなかったけれど毎日製図板に向かった。それでも、事務所を開いて二、三年もすると、親戚や友人の伝手で仕事の輪が広がっていった。しかし「ようやくスタッフにボーナスを払えるかと思ったのも束の間、オイルショックでほとんどすべてのプロジェクトは一夜の夢に終わった」のである。議論だけが残されていた。不況になれば「建築運動」が起ころうというが、仕事はなくても考えることはできる。「近代の呪縛」シリーズは、そうした議論のひとつの場であった。

「何処かで建築家達の集まりがあり、二次会となると、同世代の顔ぶれが自然に十名ばかり飲み屋のテーブルを囲むことになる。……最近の建築雑誌の話題作に関する批評、と言ってもほとんどは悪口雑言、身近な建築家達の噂話に始まり、少々酒が廻り出すと、同席している者相互の間にジャブが飛び交う。正確なス



伊東豊雄「中野本町の家」1976年

にしても、地球大の建築思想がある。石山が深く二人の建築思想に共鳴して出発したことは明らかである。しかし、システムそのものを提案する位相と石山が発見しようとした位相との間には、産業社会に対する期待や信頼において大きなずれがあった。

石山は、振り返って、「僕はやっぱり川合健二、バックミンスター・フラー……流れとしたらそういう人たちの考え方をベースにしている……そういう人たちの考え方をベースとして、時々表現という演技はして見せるゾというような感じですね」（『石山修武考える、動く、建築が変わる―ひろしま、生活、家、コミュニケーション』TOTO出版、一九九九年）という。

果たして、石山のやってきたのは「表現という演技」に過ぎなかったのでしょうか。

小さな家の設計は可能か？

石山修武の初心、「建築（住宅）理論」の核は、『秋葉原「感覚で住宅を考える」に最もシャープに示されている、と思う。その冒頭で、「小さな家の設計は可能か？」（『秋葉原「感覚で住宅を考える」三〇～三五頁）と石山修武は問う。そして、「建築家は無力である」と書き、「建築家は無力であってはならない」と書く。どういうことか。『住宅道楽―自分の家は自分で建てる』（講談社選書メチエ、一九九七年）には、「住宅建築家宣言」があり、「小住宅の可能性」を問う論考とともに、「世田谷村」へ至る住宅設計の悪戦苦闘が綴られている。

戦後まもなく、すべての「建築家」にとって共通に取り組むべきテーマは「住宅」であった。四二〇万戸の住宅が不足する中で、住宅建設は喫緊の課題であったのである。その大課題に対して、建築家たちがとうとうとした方法にはいくつかの流れがあった。それぞれの流れの帰趨については『戦後建築論ノート』に譲るが、





象設計集団「笠原小学校」1982年

ンターの整備など農家をサポートする施設が集中するのが「新しい村」である。首都圏の町とはいえ、江戸時代に「ほっつけ（掘上げ）田」（新田開発）によって拓かれた場所である。市街地の近くに位置しながら未だにかつての農村風景を残している。ほっつけの再生と森の拡充が「新しい村」の中心テーマである。

社区総体营造

前述のように、台湾での仕事も、郭中端という吉阪研究室のかつてのメンバーを通じての縁である。「冬山河親水公園」以降、宜蘭で行政官庁中心の建築を次々に設計してきたことも前述の通りである。一九八八年に設立された象設計集団の台湾事務所にはいまでは、かなりの数のスタッフがいる。東京事務所とともに、南北から日本を挟撃する鮮やかなシフトを敷いていることも、既に触れた通りである。

台湾には、東南アジアに通い始めて（一九七九年）以降、その行き帰りに度々訪れる機会があった。李登輝が初代総統に選ばれた時も、再選の時も、さらに民進党の陳水扁が総統になった選挙の時も一九九九年の九・二二集集大地震の調査で台湾にいた。だから、台湾のまちづくりについては、それなりによく知っているつもりである。もともと移民社会であり、しかも国民党の相互監視システムにおいて、一九八〇年代まではコミュニティなど存在しないに等しい状況であった。

三八年間続いていた戒嚴令が解除された一九八七年に象設計集団の宜蘭行きも開始されるのであるが、翌年蔣経国が死去し、李登輝副総統が本省人として初めて総統に就任して以降、社会の基礎としての地域社会の構築（再建）を目標に掲げ、運動の先鞭を付けたのは行政院文化建設委員会の陳其南である。彼の発案、主導のもとに開始されたのが「社区総体营造」運動（一九九四年）である。並行してノーベル化学賞受賞者